

第七章 女性の高等教育と無意識のバイアス払拭が 次世代の幸福の鍵になる

大隅 典子

はじめに

人口の約半分は女性であるにもかかわらず、日本ではその能力が活用されていない。女性の参画が遅れているのは特に政治や経済の分野であるが、高等教育の分野においても、諸外国と比してギャップがある。東北大学は1913年（大正2年）に3名の女子学生の入学を許可した。本章では、ちょうど110年前の日露戦争後の当時、最上位の高等教育機関である「帝国大学」に女性が学ぶことがどのようにして可能となったのかを振り返り、日本の置かれた現状を踏まえ、コロナ禍によって浮き彫りとなった社会の転換点において、人々が心豊かに暮らしていく上で、アカデミアにおける女性の参画が鍵となることについて考察したい。

第一節 日本初の女子大生の誕生

1.1 東北大学開学の理念としての「門戸開放」

東北大学初代総長の澤柳政太郎は、1890年に文部省（当時）に入省した官僚であった。第二高等学校、第一高等学校の校長を歴任した後、文部省に戻り、初等中等教育の整備や小学校の修学年限延長にも尽力した。さらに、1877年創立の東京帝国大学（帝国大学と規定されたのは1886年）、1897年創立の京都帝国大学に続く帝国大学として1907年に東北帝国大学や九州帝国大学の開設、また奈良女子高等師範学校の開設も決定した。近代日本の国としての成り立ちを整えるこの時期に、澤柳は教育の重要性を訴え、次々と具現化していった。

創設開学に当たって澤柳は3つの理念、「研究第一」「門戸開放」「実学

尊重」に相当する考えを打ち出した。当初より「研究大学」であることを標榜したのは、我が国では東北大学が最初である。「実学」は「虚学」に対応する言葉とされるが、現代的な意味としての「役に立つ学問」というよりは、当時は「形式化した人文主義の文献本位の学問に対して、自然科学の発達や哲学の経験論に影響された実用的・実践的な研究方法」（国民百科新語辞典（1934）「実学主義」より）としての意味合いだったと考えられる（そうでないと、東北大学がまず「理学校」として始まったこととの間に齟齬が生じる）。では、「門戸開放」とは、どういう背景があったのか。

当時、東京帝国大学と京都帝国大学に入学するには、大学進学「予科」としての「旧制高等学校」を卒業する必要がある。当時の旧制高等学校は男子のみに開かれたエリート教育機関であったが、澤柳らは「国内外から多くの優秀な学生を集めるためには、“傍系入学”を認めるべき」という画期的なポリシーを打ち出す。すなわち、旧制高等学校卒業生以外に、高等師範学校や専門学校、また師範免許取得者にも受験資格を与えたのだ。澤柳は高等教育を享受できる人材の多様性を重視した。まさにダイバーシティの先駆けである。

1.2 メンターとキャリアパス指導

この東北帝大の画期的な受験資格に、東京女子高等師範学校（女高師、現お茶の水女子大学）の校長であった中川謙二郎が目をつけた。当時、東北帝大教授の林鶴一が女高師でも講義を行っており、その指導を受けていた牧田らくに東北帝国大学の受験を勧めたのだ。また、東京帝国大学の長井長義は女高師や日本女子大学校（現日本女子大学）で化学を教えていたが、牧田らく受験の話を目ざとく聞きつけたと思われる。長井は教え子である女高師の黒田チカと日本女子大学校の丹下ウメ（長井の指導により、女性で初めて中等化学教員検定試験に合格していた）にも熱心に受験を勧め、中川には「黒田チカも受験させるべし」と進言

した。

これを受けて、1913年5月6日に中川は澤柳政太郎総長宛に、自校卒業生の2名が東北帝国大学の受験を希望している旨を伝える手紙を送っている。その中には、「もし入学が許可された場合、卒業後は再び東京女子高等師範学校で採用したい」（東北大学史料館資料『教務書類（甲）』大正二年度をもとに加藤諭意識、東北大学「女子大生誕生の地:特設サイト」より）ということまで書かれていた。つまり、中川や長井は素晴らしいメンターであり、教え子のキャリアパスまで考えた親身の指導を行ったのだ。

これに対し、東北帝国大学は「入学試験を実施すること、志望者が定員より多い場合には選抜となる」旨、同年5月13日に返答した。このため、最終的には女高師出身の黒田チカ、江澤駒路、牧田らく、そして日本女子大学校出身の丹下ウメの4名が東北帝国大学を受験することになった。

1.3 日本初の女子大生誕生

当時の帝国大学は9月からの秋入学であった。4名は8月8日から12日の間に体格検査と入学選抜試験を受けた。本当に女子に入学試験を受験させたことを聞きつけた文部省からは、澤柳政太郎に代わり第二代総長となっていた北條時敬へ「元来女子ヲ帝国大学ニ入学セシムルコトハ前例無之事ニテ、頗ル重大ナル事件ニ有之、大二講究ヲ要シ候」という問合せが8月9日付で送られている。

北條はこちらにすぐに返答はせず、4名の入試は続行。8月13日に合否判定が為され、黒田チカ、牧田らく、丹下ウメの3名の合格が決まる。理科大学学長（現在の理学部長）の小川正孝と北條が決裁し、3名の女性の名前を含む合格者名簿が翌14日に文部省に宛て発送されることとなった。

実は、この件は世間の注目を集めており、16日にリーク報道が東京朝

日新聞、読売新聞、東京日日新聞に掲載された。このため「女子大生の日」は8月16日とされたこともあったのだが、コロナ禍の2020年に東北大学は、正式に入学許可が官報に掲載された21日をもって「女子大生の日」として正式に記念日登録した。ちなみに、北條はその後、8月25日にしれっと事後報告に文部省に出向いている。電話やメール等の通信手段が一般的ではなかったからこそ、3名の女子大生誕生がこの時期に可能となったのかもしれない。

1.4 3人の女子大生のその後

29歳で東北帝大の化学科に入学した黒田チカは、真島利行の指導を受け、有機化学の研究に没頭した。1916年5月に無事卒業し（当時32歳）、日本初の女性理学士となった。その後、1921年から1923年（37歳から39歳）まで文部省留学生として渡英し、オックスフォード大学で有機化学の研究を続けた。帰国後も紫根や紅花などの日本産植物の色素を抽出してその構造を決定した。1929年（45歳）に「紅花の色素カーサミンの研究」により博士号を取得し、保井コノに続き日本で2人目の女性理学博士となった。その後も理化学研究所員として青花、黒豆、茄子、シソなどの色素分析の研究を行い、また玉葱からはケルセチンという血圧降下作用のある物質を同定して、「たまねぎおばさん」というNHKの子供向けドラマのモデルとなった。

4つ年下の牧田らくは、黒田とともに1916年に（28歳で）東北帝大を理学士として卒業し、大学院に在籍しつつ、母校である女高師に数学講師として復帰した。その後、洋画家の金山平三と知り合い、1919年に結婚する。だが、数学科の教授と家庭の両立が難しく、すぐに退職することとなり、アカデミアからは退いた。

丹下ウメは、先の2人よりも若干年上で、入学時点で40歳であった。澤柳の理念「門戸開放」は、年齢のダイバーシティも生じさせていたことになる。黒田と同じく、化学専攻で真島利行の指導を仰いだり、休学

のため2年遅れて1918年に(45歳で)卒業して理学士となった。その後、東北帝大の大学院に進学し、応用化学教室助手を経て、米国のスタンフォード大学に留学したのは48歳。コロンビア大学でも栄養化学を学び、54歳のときにジョンズ・ホプキンス大学にて博士号を取得した。帰国後は、母校である日本女子大学校の教授に迎えられ、教鞭を執る傍ら、理化学研究所の鈴木梅太郎の下でビタミンB2複合体の研究に励んだ。その成果をもとに東京帝国大学より農学博士の学位を授与されたのは1940年、なんと67歳のときである。人はいくつになっても学ぶことができる。まさに、リカレント教育のパイオニアだ。丹下はまた、日本婦人科学者の会を立ち上げるなど、女性研究者の地位向上にも尽力した。

1.5 文系初の女子大生

2023年は東北大学において理系初の女子大生入学から110周年の節目であったが、黒田らの後、コンスタントに女子学生の進学が続いた訳ではない。次の女子学生入学までは10年余もの歳月が必要であった。その契機となったのは「総合大学化」である。

1922年に東北大学に理学部、医学部、工学部に加えて「法文学部」が設置されることになった。これはもともと、初代総長の澤柳が目論んでいたことだ。なぜなら、澤柳は、第一高等学校校長や京都帝国大学文学部初代学長を務め、江戸文学者であった狩野亨吉の蔵書等を開学当初より収集し、東北大学にリベラルアーツの流れを拓くことを想定していたのだ。現在、国宝2点を含む狩野のコレクションは、「狩野文庫」として附属図書館に収蔵され、デジタルアーカイブとして公開されている。

東北大学の法文学部設置を受けて、1923年、関東大震災の年に帝国大学初の文系女子学生が誕生する。法文学部第一期生となったのは、久保ツヤ(旧姓黒瀬)、櫻田フサ(旧姓磯貝)の2名。両名ともに女高師の卒業生として受験資格があった。久保は、心理学を学ぶ傍ら、宮城女学校で教鞭を取っていた「社会人学生」の草分けでもある。櫻田の専攻は哲

学であった。

その後、第二次世界大戦が終結する 1945 年までの間に、東北帝国大学の法文学部には 104 名の女子学生が入学した。これは、理系の女子学生がすべての学部を合わせて 25 名であったのに対して 4 倍の数であり、日本の女子高等教育に関して大きな貢献があったと言える。実際、久保は後に東京家政学院短期大学の教授となり、櫻田は実践女子専門学校教授となった。この他、日本女子大学校を卒業した後に東北帝国大学の法文学部国文科に学んだ青木生子は、1981 年に母校の学長となり、12 年間にわたり女子高等教育に尽力した。

第二節 理系分野への女性の参画を阻むもの

2.1 東北大学の現状は日本の縮図である

さて、日本初の女子学生は理系（化学と数学専攻）だったのだが、その後の歴史的な経緯により、日本では「女子＝文系」という「無意識のバイアス」が他の国々よりも甚だしく、STEM（科学、技術、工学、数学）分野への女性参画は現時点でも著しく少ない。2021 年に OECD が公開したデータでは、自然科学分野に進学する女性は、36 カ国の平均値がすでに半数を超えて 52%、工学でも 26%であるのに対し、日本での比率はそれぞれ 27%と 16%と、約半分となっている。

東北大学は歴史の長い総合大学の中でも構成員が理系に偏った大学であり、国立大学法人化および運営費交付金削減の煽りを受けて、この傾向は強まった。運営費交付金削減は結果として人件費削減となり、教員退職後の新規採用を見送るなどの必要に迫られた。このときに、理系はなんとか競争的資金を獲得することにより、博士研究員や特任助教等のポストを確保したのに対し、そのような高額の研究費を獲得しにくい文系ではポストを補充することができなかったことが、東北大学の人的構成がさらに理系に偏るきっかけとなった。令和 4 年 5 月 1 日付けの統計では、東北大学の入学者の女性比率は、学士 26.4%、修士 25.0%、博士

30.9%、助教・助手を含む教員の女性比率は 19.7%（クロスアポイントメント教員等含む）、助教・助手を除く女性上位職教員では 13.9%（同上）となっている（東北大学男女共同参画推進センター HP 参照）。すなわち、東北大学における女性参画は、いわば日本の理系におけるジェンダーギャップの縮図といえる。

2.2 女性は理系に向いていないのか？

日本初の理系女性は何人か、女性は理系に向いていないのだろうか？

そんなことはない。エビデンスは種々、報告されている。たとえば、OECD が 3 年おきに行っている国際的な学習到達度テスト（PISA）の 2018 年のデータでは、高校 1 年時点で、女子の数学リテラシーの平均点は 522 点で、男子の平均点 532 よりも若干低い。だが、OECD 平均を見てみると、女子 487 点、男子 492 点なので、日本の女子の数学リテラシーの平均点の方が OECD 平均の男子の平均点より 30 点も高いのだ。

このような女性の理数系のリテラシーが日本では活かされていない。数学的リテラシーや科学的リテラシーにおいて習熟度のレベルの上位層の生徒のうち、30 歳で技術者や科学者として働いていることを期待しているのは、日本の女子では約 30 人に 1 人だけである（男子でも 10 人に 1 人しかいないという点も問題ではある）。理数系の習熟度レベルにおいて上位層の女子の 4 分の 1 は、免許によって安定的に守られる医療関係の職業に就くことを期待している。これに対し、習熟度のレベルの上位層の男子で医療系の就職を期待するのは 8 分の 1 である。さらに日本では、ICT 関係の職業に就くことを期待しているのは、男子でも 6%、女子ではたった 1%のみである。

ではなぜ、高い理数系リテラシーを持つ日本の女子生徒たちが、大学進学時点になると理系に進学しないのだろうか？

2.3 セルフコンフィデンスの低い女子たち

2015年のPISAの分析によれば、数学や科学の問題を解く能力に対する自信は男子より女子の方が低い。数学に対する不安が強い生徒の比率も、女子の方が高い。数学に対する自信と数学に対する不安が同じレベルの男子と女子を比較すると、成績の男女差は無くなる。2018年の調査では、日本を含むほぼすべての国・地域で、女子は男子よりも失敗に対する恐れをより強く表明しており、この男女差は習熟度のレベルの上位層の生徒においてより大きかった。国を越えて同様の傾向が見られるということは、生物学的な差異を反映している可能性がある。

こういう心理学のテストがある。数学の試験を行う際、「学籍番号のみ」「学籍番号と名前」「学籍番号・名前・性別」を書かせると、その順に女子生徒の平均点が悪くなる（拙訳訳書『なぜ理系に進む女性は少ないのか』（西村書店）参照）。あるいは、教師が問題用紙を配りながら「昨年、このテストは男子の方が平均点が高かったんだよ」と伝えるだけでも、同様のことが生じる。あとひと頑張り考え抜くかどうか、というところで、「どうせ私は女子だから……」と諦めてしまうのだろう。「数学は天賦の才」と伝えられるか、「天才数学者でも努力を続けた」と教わるかによっても、ステレオタイプ脅威が生じてしまう。

おそらく中学生になるまでの間、教育としてはきわめて男女平等に為されているのだろうが、子どもたちは様々なかたちで周囲からのメッセージを受け止める。そのような中には、「女子は可愛くあれ」「女子は責任を取らなくてよい」というようなものもあり（後述）、結果として、女子生徒たちは、少しの挫折で例えば「自分は数学の才能が無い」と思い込むようになる。

一見、この違いは小さなことのように見えるが、何かの意思決定をするたびごとに複利的に効果が表れてくるのだろう。結果として、女子生徒は大学受験において理系を選択しない割合が多くなってしまう。

2.4 理系と文系というレッテル

海外でも STEM 分野とヒューマニティーズ（人文社会系）のような分け方はあるが、大学受験の時点で日本ほど明確に理系・文系を区別はしていない。たとえば米国では、大学入試は学部ごとではなく、基本的にアドミッションオフィスが行う。大学は一括して入学者を選抜し、最初の2年はとくにリベラルアーツ教育が重要視され、後半2年では、例えば「歴史学と生物学」のような、文理をまたいだダブルメジャーも可能である。

日本では、伝統的に大学入試は学部ごとで行われ、専門教育が前倒しに開始されることもあり、学生が学ぶりベラルアーツのバリエーションは狭い。また、大学進学に際して“効率よく”勉強することを目的として、高等学校の間に「理系・文系」の振り分けが行われる。あるいは、理数系のコースのある高校に進学するかどうかの意思決定を、中学2年頃に行う生徒もいるだろう。社会の変化のスピードが早くなった現代において、広い選択肢があるべき10代の若者が、あまりに早く進路決定をしなければならない現状は、男女にかかわらず大きな問題であると筆者は考えるが、とりわけ女性の理系選択という点において重要な課題を抱えている。

第三節 女性が高等教育を受けるのを妨げるもの

ここまで日本社会の中でも超マイノリティである「理系女性」を中心に述べてきたが、もう少し広げて日本の女性全体を取り巻く状況について考察しよう。世界経済フォーラムより毎年発表される「ジェンダーギャップ指数」2022年版において、日本は調査対象146カ国の中で相変わらずG7で最低の116位という悲しい状況である。主要な理由は、政治と経済の分野における女性の参画が著しく低いからである。これは、理系女性が少ないということと“根っこ”が共通した問題であると思う。すなわち、女性が主体性を持たなくても良い、女性がリーダーになるべきではない、というような社会の圧力がいまだに存在することが根本に

存在する。

3.1 女性の大学進学 of 地域格差と人口流出

2022年版の「ジェンダーギャップ指数」に関して、「教育」は今回、21カ国同率1位というスコアになった。これは、指数の根拠となっている識字率や初等・中等教育の就学率において男女差が無いためだが、日本の高等教育においてはジェンダーギャップが存在する。現在、大学進学者の女性比率は全国平均で54.4%だが、短大を含めると64.1%であり、女性の一定数が、2年間の就学で済み、より専門性の低い「短大」に進学していることがわかる。

さらに問題な点として、大学進学率には大きな地域格差が存在する。国立社会保障・人口問題研究所の人口統計資料(2022)によれば、東京都や京都府では70%を超える高校卒業生が大学に進学するが、これらの地域から離れた東北・九州地方は進学率が低い。女子のみで統計を取ると、その傾向はさらに強まり、東京が74.1%、京都が66.8%、兵庫が56.1%なのに対し、もっとも低い鹿児島では34.6%、次いで大分が35.8%、佐賀が36.6%である。丹下ウメは鹿児島出身、黒田チカは佐賀出身なので、この状況を知ったら、さぞかし嘆くことだろう。

進学率の格差は経済格差と相関しているが、さらに女性の問題は、地方の文化的な背景がある。「女に学問はいらない」というマインドは、女性の地位が高くなってはいけない、女性はリーダーではなく、サポーターに回るべき、という無意識のバイアスと繋がっている。

このような背景から、地方の女性が都会に転出していく傾向がある。就職先の少ない地方から大都市圏に人口流入するのは一般的な傾向であるが、総務省の調査によれば、東京、千葉、大阪、福岡では、女性の流入の方が男性を大きく上回っている。また、コロナ禍により東京では男性は転出傾向が見られたのに対して、女性はそうではない。地方では自分の活路を見いだせないと考える女性が、多様な仕事があり男女格差

が少ないと考えられる都会を目指す傾向は変わらない。

3.2 少子化と女性の社会参画

2022年6月、厚生労働省より2021年の出生数は81万1604人で、合計特殊出生率は1.30と発表された。2022年の予測値は77万人前後となっている。戦後の第二次ベビーブームの1973年には出生数は209万1983人であったので、実に半世紀で3分の1近くに減ったことになる。少子化が止まらない。

少子化の原因は明白だ。結婚年齢が上昇し、第一子を持つ年齢が上昇しているからである。2017年の少子化対策白書によれば、1947年の初婚の平均年齢は、男性が26歳、女性が23歳だったが、2020年の時点で男性が31.0歳、女性が29.4歳に上昇した。第一子が生まれる時点での母の平均年齢は、30.7歳となっている。女性が妊娠可能な年齢には生物学的な上限があるので、結婚年齢が上がれば、当然ながら持てる子どもの数は減少する。

ではなぜ結婚しないかという点、経済停滞や経済格差もあるが、何より「国が若い世代が子どもを持つことに優しくない」という一言に尽きると筆者は考える。日本では自然分娩は“病气”ではないと見なされるので、保険適用ではなく、平均的には40～50万円かかる。さらに、ベビーウェアやオムツ、哺乳瓶、赤ちゃん用の寝具、ベビーバス、抱っこ紐、授乳服などの、様々なベビー用品やマタニティ用品も買わなければならない。国民健康保険等に加入していれば、出産育児一時金として42万円が後から申請により給付されるが、適用外のケースもあるだろう。自民党の議員連盟の要求を受け、この額が47万円に引き上げられることが2022年10月に発表されたが、たとえばカナダでは、出産費用は公的医療保険の対象となり無料である。妊娠期から安心して子どもを持つことができるのであれば、妊婦や家族のストレスも減るだろうし、子どもを持つことへの不安が減り、それが大きな少子化対策になるだろう。

保育園の待機児童の問題なども同様である。母親がフルタイムの仕事に就けないと保育園に預けられない、保育園が見つからないとフルタイムで働けない、という堂々巡り（負のスパイラル）があるようでは、子どもを持つことを躊躇するだろう。出生数が減少したから、保育園の定員を減らすということはすべきではない。子どもがいつ生まれるかは人間がすべてコントロールできる問題ではないことを踏まえれば、厳格な定員管理は保育園には相応しくない。

なお、声を大にして言いたいのが、「女性が働くと少子化になる」というのは、まったくの誤解である。女性は「働きたいから子どもを産みたくない」のではない。世界を見渡すと、女性の就業率の高い国ほど、合計特殊出生率も高いという正の相関性がある。このことは、出産や子育てのためのインフラがどのように整っているかという社会制度の問題であることを意味する。ちなみにフィンランドでは、子どもが生まれた両親に「出産祝い」が届けられるという。15着もの衣類（防寒用のオーバーオールなども含む）からオムツ、布団セットそして、櫛や歯ブラシ、水温計や爪切り鉢まで、約50点が入った「育児パッケージ」は、「産んでくれてありがとう」という国からのメッセージだ。

「今後の少子化対策は、収入が不安定な男性をどのように結婚までもっていか、そのような男性と結婚しても大丈夫という女性をどう増やすかにかかっている」というような認識は、大きくズレている。むしろ「一人で子育てしても困らない」社会インフラの整備が必要なのだ。

子どもの数は、家庭における男性の家事育児参画の度合いと明確に「正の相関性」を示す。世界的にも、女性の家事負担が重いほど出生率は低い。2015年に厚生労働省が子どもを持つ夫婦に対して行った調査では、夫の「休日の」家事育児時間が6時間以上であった家庭では87.1%が第二子に恵まれたのに対し、夫が休日でも家事育児に参画していない家庭では、90%が第二子を得ていない（平成30年内閣府少子化白書参照）。「男性が主たる稼ぎ頭で、家庭は女性が守る」という昭和の家庭像

のままでは、少子化は止まらない。社会全体の意識改革と現状に合わせた制度改革が必須である。

第四節 女性が高等教育を受け社会で活躍するためには

日本の女性は優秀なのに、その力が活かされていない。これは社会が大きく変革しようとしている転換期において、大きな損失である。では、どうすればよいか？ 何より「無意識のバイアスの払拭」が重要である。

4.1 無意識のバイアスの払拭

無意識のバイアスは、色々なところに潜んでいる。英国 BBC 制作の動画で、子どもに接する際の無意識のバイアスについての啓発が為されている (<https://www.youtube.com/watch?v=nWu44AqFOiI>)。これは、1～2歳の男女の赤ちゃんの名前を入れ替え、着るものも替えると、周囲の大人がどのように振る舞うのかを調べる心理学実験である。Marnie ちゃんは男の子っぽい青系のシャツを着せられ Oliver 君となり、Edward 君はフリフリのピンクのドレスを着て、Sophie ちゃんと呼ばれる。さて、被検者は Oliver 君や Sophie ちゃんにどのように接するか？なんと、Oliver 君には車やパズルのようなおもちゃを与え、Sophie ちゃんにはふわふわのぬいぐるみを与えたのだ。まさに、シモーヌ・ド・ボーヴォワールが『第二の性』で述べた、「人は女に生まれるのではない。女になるのだ」を見せつけたような実験結果だ（注：生物学的には、哺乳類はデフォルトが雌で、男性ホルモンの影響によって雄化するので、「人は男に生まれるのではない。男になるのだ」が正しい）。

無意識のバイアスの事例と、それを取り除くことができるという証明で、もっとも有名なのは「ブラインドオーディション」だ。2000年に発表された論文では、米国のトップオーケストラの団員構成に関して、1970年代には男性が95%だった（すでに音大卒業生の半数近くが女性で

あったにもかかわらず)。そこで、第一次審査に関して、審査員とオーディションを受ける候補者との間にスクリーンを置いて、審査員は純粋に音だけを聴いて判断させることにしたところ(某 TV 局のお正月の有名番組を思い出していただければ良い)、一次審査を通過する女性の割合が5割上昇して、最終審査で合格する女性も以前の数倍となり、2000年の時点で女性奏者の割合が25~46%に上昇した。

もう1つ、「ハイディとハワード」という、ハーバード・ビジネススクールで行われた実験がある。キャリア抜群の上司「Howard Roizen」(男性の名前)の下で働きたいか? という問いに、被検者のほとんどが肯定したのだが、「実は Heidi Roizen (女性の名前) でした」と種明かしをした場合に、一緒に働きたくないという答えに転じるというものである。履歴書や人物描写が同じであるにもかかわらず、女性リーダーに対するジェンダーバイアスがあることを、この実験結果は示している(なお、約10年後に同じ調査をしたところ、Heidiの下で働きたいという答えが増えたことは、その間のポジティブな変化といえる)。

このような心理的バイアスは人事に大きく影響する。人は自分と近い属性の人を、より信用し高く評価しがちであり、“ボーイズクラブ”は拡大再生産される。そこで東北大学男女共同参画推進センターでは、無意識のバイアスについて啓発するためのパンフレットを発行し、学内の全教職員に配布している(同センターHPからPDFファイルをダウンロードできる)。より強力に推進するためには、人事に関する委員会等の構成員の人的ダイバーシティに配慮することが必要である。

4.2 幼少期からの刷り込み

日本の玩具メーカーのタカラトミーの着せかえ人形「リカちゃん」は、米国の「バービー人形」を真似て1967年に登場した。フルネームは「香山リカ」で、音楽家のパパ、ピエールと、ファッションデザイナーのママ、織江の娘という設定。現在はTwitter公式アカウント (@bonjour_

licca) も持っている。それによれば、皮肉なことに、リカという名前であるにもかかわらず「算数は苦手」で、どうも理系ではないようだ。衣装持ちだが、キラキラでフリフリのドレスが多い。

一方、リカちゃんの前に米国で人気を博していた、いわば着せかえ人形本家のバービーの方は半世紀の間に、オリジナルの金髪碧眼だけではなく、肌や髪の色も多様化し、さらに宇宙飛行士や科学者のコスプレもできるようになっている。ごく最近では、車椅子や義足のバービー人形も登場した。このような多様性に合わせた配慮が日本でも必要だろう。

2016年にアイドルグループ HKT48 の「アインシュタインよりディアナ・アグロン」という歌が、というよりは、その歌詞が炎上した。「女の子は可愛くなきゃね 学生時代はおバカでいい」、「世の中のジョーシキ何も知らなくてもメイク上手ならいい」という直ぐな言葉に、筆者自身、かなり衝撃を受けた。

こういう刷り込みを若い世代に与えて欲しくないと心から願う。表現の自由はあるにせよ、放送倫理・番組向上機構 (BPO) のような組織が、ジェンダーギャップを助長するような案件に対応してほしい。

4.3 教員の偏見への気付きと払拭

社会経済学者の山口数男シカゴ大学教授によれば、女性が多数を占める職種は、男性が多数を占める職種よりも平均賃金が低くなりがちで、そのことがさらに、その職種を男性が敬遠するという連鎖に繋がるという。仮に資格による給与の差が無い職業であっても、看護師は女性が90%以上を占める職業であり、医療の現場では男性看護師がより求められているものの、なかなか進まない現状がある。

現在、小学校教員の6割が女性であることは、今後、男性が初等教育教員を望まない傾向が強くなる可能性が懸念される。また、職位が上がるにつれて女性の割合が減り、校長では20%程度に留まっている(文部科学省学校基本統計)ことは、生徒に対して「女性はリーダーに向かな

い」という無意識のメッセージを送っていることになる。

現在、教員免許取得のためにもっとも効率のよいルートは、「教育学部」に進学することである。その方が教育実習などを単位として取得することが可能であるからだ。ここで前述の「理系 vs 文系」の問題が浮上する。教育学部は文系学部であるので、小学校教員の女性のマジョリティは文系女性である。そのことが無意識レベルでも反映され、女子生徒に対して「女性は理系に向かない」という無言のメッセージが伝わっている。この意識はもちろん男性教員も同じである。中学校、高等学校においても「女の子は数学、得意ではないからね」というような言葉をかけられた女子生徒がそれなりに存在するという事実には、筆者は愕然とした。

2021年に内閣府は学校の先生向けの啓発冊子を作り、例えば理科の授業において「実験行うのは男子、記録するのは女子」という、生徒間で自然にできた役割分担に任せていることは、リーダーシップの涵養に関して、ジェンダーバイアスがあると指摘している。また、女子生徒が理科系の科目に関して学習意欲を削がれることにもなるだろう。冊子ではさらに、テストの点数の良かった女子生徒に「〈女子なのに〉数学や理科ができて、すごいね」と褒め言葉をかけることは、「好意的性差別発言」であるとも警告している。文部科学省は都道府県教育委員会を介して、教員研修の参考としてこの冊子を周知するように求めているが、現場の改善に至るには時間がかかるだろう。

コロナ禍で露呈した日本のDX後進国の惨状も、情報科学分野への女性の参画が著しく悪いことと無関係ではないだろう。「コンピュータはオタクな男子のもの」という状態を続けていては、ユーザにとって使いやすいシステム開発は望めず、使い勝手の悪いシステムに高額のコストが消費されていくことになる。

おわりに：なぜ社会は女性を必要とするのか？

社会の種々の場面で、より女性が参画すべきなのは、ジェンダーギャップ指数のランクを上げるためではない。女性の参画が著しく悪い分野において、人的ダイバーシティを確保することこそが変革やイノベーションの鍵となるからである。たとえば、2015年に大手出版社のエルゼビアがドイツで行った調査報告「Mapping Gender in the German Research Area」では、学際研究論文の著者の女性比率に関して、男性のみ、あるいは女性のみが著者の論文よりも、どちらの性も著者に含まれる論文の方が、トップ10%論文の比率が高かった。経済分野では現在、エコ・ソーシャル・ガバナンス（ESG）に配慮した企業が投資先として適切であるとされ、女性活躍度に着目されている。日経xwomenによれば、日本の上場企業に関して、2016年時点で女性管理職比率の高さが上位4分の1と、下位4分の1の企業群について、純利益の増益率を比較したところ、前者は28%の増収益になったのに対し、後者は43%減益となった。あるいは、日本における種々の“ボーイズクラブ”が組織の既得権益や体面を守ることを優先し、時代に合わせたガバナンスの上でいかに遅れを取ってきたのかは、日々のニュース等からもうかがい知ることができる。政治の分野における女性の参画が進むことは国全体の意思決定や制度改革の上で必須である。

現在、「ジェンダーダイノベーション」に関心が集まっている。これは、生物学的・社会的な性差に配慮する、あるいはむしろ着目することによって、新たなイノベーションを生み出そうとするものである。有名な事例として、自動車事故に際して、女性は男性よりも、死亡率は17%、重症を負う確率は47%、中程度の傷害を負う確率は71%高い（『存在しない女たち』参照）。これは自動車のシートベルトの開発において、女性の体を考慮されていなかったためである。つまり、男性が普遍的という考え方から脱却し、性差を前提にこれまで着目されていなかった女性の観点から見直すことによって、画期的な研究や製品開発につなげることができるのだ。これは、古い価値観に基づくフェミニズムからの脱却と

も言えるだろう。

男女ともに「無意識のバイアス」に気付き、それを払拭すること、また、女性が現代の常識に相応しいリベラルアーツを学び専門性を高める高等教育を受け、セルフコンフィデンスを持ち、これまで女性の参画が拒まれてきた分野で活躍することが、停滞している日本を打破し、地方の活性化を推進し、世界に貢献する鍵となるだろう。高等教育を担う大学において、ダイバーシティ推進の責務はきわめて重い。東北大学はようやく2022年4月5日に「ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン宣言」を発出し、これを転換点としていっそうの取組みを行う覚悟である。

謝辞：

本稿執筆にあたり、東北大学史料館の加藤諭准教授、男女共同参画推進センターの李善姫講師に査読頂きましたことに深く感謝申し上げます。

註・参考文献

- ロンダ・シービンガー、小川員里子、外山浩明、東川佐枝美著、『ジェンダーは科学を変える?! —医学・霊長類学から物理学・数学まで』、工作舎、2002年
- スーザン・ピンカー著、幾島幸子、古賀祥子訳、『なぜ女は昇進を拒むのか——進化心理学が解く性差のパラドクス』、早川書房、2009年
- スティーブン・J・セン、ウェンディ・M・ウィリアムス著、大隅典子訳、『なぜ理系に進む女性は少ないのか?: トップ研究者による15の論争』、西村書店、2013年
- 山ロー男著、『働き方の男女不平等 理論と実証分析』、日本経済新聞出版、2017年
- キャロライン・クリアド＝ペレス著、神崎朗子訳、『存在しない女たち 男性優位の世界にひそむ見せかけのファクトを暴く』、河出書房新社、2020年
- 大隅典子、大島まり、山本佳代子著、『理系女性の人生設計ガイド 自分を生かす仕事と生き方』、講談社ブルーバックス、2021年
- 秋場大輔著、『決戦! 株主総会 ドキュメント LIXIL 死闘の8カ月』、文藝春秋、2022年
- 谷口真由美、『おっさんの掟: 「大阪のおばちゃん」が見た日本ラグビー協会「失敗の本質」』、小学館新書、2022年
- 内閣府男女共同参画局 HP : <https://www.gender.go.jp/>
- 東北大学男女共同参画推進センターHP : <http://tumug.tohoku.ac.jp/>
- 国立教育政策研究所・OECD 生徒の学習到達度調査 :
<https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/index.html>
- 国立社会保障・人口問題研究所・人口統計資料集 (2022) :
<https://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Pbpular 2022.asp?chap=0>
- 東北大学男女共同参画推進センターHP・データ集:
<http://tumug.tohoku.ac.jp/public-relations/data/>
- 東北大学 HP 特設サイト「女子学生誕生の地」:
https://www.tohoku.ac.jp/tohokuuni_women/